

(んー……)

夜の街角には、欲望の匂いが、安い香水のそのように充満している。

ヘルタは噴水の縁に腰掛け、行き交う人々を眺めていた。

足を組めば、太ももの白い肌が夜気に晒される。

武器らしきものは腰にも背にも見当たらない。

無防備に薄い布を纏っただけの、世間知らずで遊び好きな若い女――。

そう見えることこそが、彼女の最高の武装だった。

(……っと)

やがて、視線が止まる。

路地の陰から一人の男が、彼女を見ていた。

上等な外套と懐の膨らみから、そこそこの金を持っていることは明白だ。

男の目はヘルタの露わな鎖骨と太ももを行き来している。

(ちょうどいいカモだね)

ヘルタは心の中で舌なめずりをして、男と目が合った瞬間、にやりと悪戯っぽく笑ってみせた。

誘われるがまま、男は足を踏み出す。

「よう、お嬢ちゃん。一人？」

「うん、退屈してたところ」

ヘルタは軽やかに噴水から飛び降りた。

男の目の前で、あえて安定の悪い着地を見せてよろめく。

男が慌てて腕を掴む。

ヘルタの素肌に熱い掌が触れて、男の喉が小さく鳴った。

「危ないな。……こんな夜更けに、いい子ちゃんが一人でいるもんじゃないぜ」

「ふふ、いい子じゃないかもよ？」

ヘルタは男の胸に人差し指を這わせ、瞳を上目遣いに覗き込んだ。

甘く、溶けるような声で囁く。

「もっと面白いとこ、連れてってくれない？ 熱くなれるところが、いいなあ」

男の顔が緩んだ。

獲物が餌に食いついた瞬間の、あの間の抜けた表情。

ヘルタは心の中でくすくすと笑った。

演技は完璧だ。

二人は、人気のない裏路地に入り込んだ。

石畳の湿った反響。

男の手がヘルタの腰を抱き寄せ、荒い息遣いが首筋に触れる。

ヘルタはそれに身を任せ、むしろ自分から男の首に腕を回して引き寄せるようにした。

「ここでいい？」

「ああ、いいとも。最高だ」

男が唇を重ねようと顔を近づけた、その瞬間。

ヘルタの右手の袖口から、極細の毒刃が音もなく滑り出た。

三寸ほどの、針のような凶器。

男がそれに気付くはずもない。

彼女は、まるで愛撫をするような自然な手つきで、男の背中にその刃の先端を触れさせた。

「ねえ」

「ん、ああ？」

「苦しくないかな？」

そう囁いた瞬間に、さっと一刺し。

第四肋骨の間から毒刃が滑り込み、突き刺さる。

男の目が見開かれた。

唇が痙攣し、何かを叫ぼうとするが、肺に回った即効性の神経毒は既に声帯を麻痺させる。

ヘルタの腕の中で、男の体が急激に重くなり、くの字に折れ曲がった。

「しーっ。静かにしてね？」

彼女はそう囁きながら、男の崩れ落ちる体を抱きとめると、そのまま路地の闇に横たえた。

男は痙攣しながらヘルタを見上げている。

その瞳に映るのは、先程までの奔放な少女の笑顔ではなく、底冷えするような無関心な光だけだった。

「ごちそうさま」

ヘルタは男の懷に手を伸ばし、革袋を探り出す。

ずっしりとした重み。

中身を確認もせず、自分の腰の隠しポーチへと放り込む。

男はもう、動かなくなっていた。

ただの路地裏の粗大ゴミだ。

(さあて……。次は、どいつかな？)

ヘルタは立ち上がると、毒刃に付着した少量の血を外套の裏地で拭い取り、再び袖の中へと収めた。

冷たい夜風が肌を撫でる。

彼女は再び、街の喧騒の方へと足を向けた。

その足取りは何も背負っていない、軽やかなものだった。

・
・
・

(ん？　なんだあれ)

ヘルタは新たな獲物を見つけていた。

噴水の近くをふらついている、冴えない男だ。
質素な旅装で、武器も持っていないように見える。
目つきもぼんやりとしていて、どうにも周囲の空気に馴染んでいない。

(どっか、よそから来たばかりの旅人かな)

なんにせよ、世間知らずのカモは都合の相手だ。

ヘルタはいつものように、軽い足取りで男に近づいた。

「ねえ、一人？　なんだか迷ってるみたいだけど」

男はヘルタを見て、少し驚いたような顔をした後、へらりと笑った。

「ああ、まあね。ちょっと観光で。この辺でどこかいいところ、教えてくれないかな？」

(観光？　はん、こんなところで？)

本当に世間知らずなやつだ。

ヘルタは心の中で鼻を鳴らし、表向きは甘ったるい笑みを浮かべた。

「いいよ。こっち、静かでいいところあるから」

男は「なるほどね」と呟き、素直にヘルタの後に続いた。

(また、面白い現地風俗が体験できそうかな？)

その旅人……時空間旅行者のカガミは、内心でそう思っていた。

この少女の態度にはどこか営業的な不審さが滲んでいたが、旅先でのハプニングもまた一興というものだ。

ヘルタは路地裏の、いつも使っているような場所に着いた。

石畳の湿った匂い。

周囲に人目はない。

ヘルタは男に向き直ると、誘うように首に腕を回した。

「ここなら、誰にも邪魔されないね」

カガミが「そうだね」と応じた、その瞬間に、ヘルタの袖口から毒刃が滑り出る。

「そう。ゆっくり寝ていいよ」

速やかに、男の背中へ。

——チンッ。

金属音が鳴り、手に返った衝撃は肉を裂く感触ではなかった。

硬い。

まるで、岩か鉄のようだ。

「え……？」

ヘルタの体が固まる。

「なるほど、そういう手口かあ」

男は平然としていて、むしろ楽しそうに笑ってさえいた。

背中 of 衣服に微小な裂け目ができているが、その下の肌には傷一つ付いていない。

「ありがちだけど、手際いいね。大したもんだよ」

そう言って、拍手さえる。

もし、ヘルタがもっとよく注意して見ていたならば、カガミが切り裂かれた現地の服の下に、異界から持ち込んだ薄手の強化服を着込んでいることに気が付いただろう。

（も、もしかしてこいつ、魔道士！？）

ヘルタは自分の知識の範囲に照らして、そう判断した。

彼女のような裏路地で暮らす者には魔法の使い手自体ほとんど縁のないもので、実際に見たことはない。

だが、魔道士と呼ばれるような腕の立つ魔法使いの中には、剣や矢をはじき返す防御の術を使う者もいると聞いたことがある。

まずい、失敗した。

気付かれてた。

彼女はすぐさま方針を変更して武器を手放すと、地面にへばりついた。

意地やプライドなぞ、路地裏で生き抜くためにはクソの役にも立たないどころか致命的なものだ。

「ひいっ！ ご、ごめんなさい！ あんまりお金に困っていたもので、つい出来心を起こしてしまったんです！ 魔道士さま、どうかご容赦を……！」

裏返った声を出す。

涙目で必死に命乞いをするその姿からは凶賊の面影は消え、ただの怯えた少女に見えた。

カガミは面白そうに、そんな彼女の様子を眺める。

「魔道士？ ははあ、なるほどね……」

じゃあ、今回はそういうことにしようか。

そう決めると、彼は鷹揚に頷いた。

「うん、わかったよ。そういうことなら、僕は別にケガもしなかったんだし、もう行っていいからね」

そう言って手をひらひらと振ると、あっさり背を向ける。

(助かった……！)

ヘルタはほっと一安心した。

だが、次の瞬間にはその胸の奥で、どす黒い感情が渦巻き始める。

(……背中を向けやがった。今なら無防備じゃないか)

さっきはこちらが罠にかけるつもりだと疑っていたらしいから、あらかじめ防護の魔法とかをかけていたのだろうが。

いくら強力な魔道士だろうと、いきなり背中から貫かれれば死ぬはずだ。

仮に毒が効かなくても、心臓を貫けば……。

(腕利きの魔道士ってことは、さぞかし金になるようなものを持ってるんだろうしさ)

いくら腕が立とうとも、こんな甘ちゃんじゃあどうせ遠からずどこかの誰かにやられて身ぐるみ剥がされて、下水にでも投げ込まれることになるに決まっている。

（だったら、今ここであたしが殺ってなにが悪いんだ？）

下手をしたらそいつになぶり殺しにされるかもしれないところを、苦しませず一瞬で楽にしてやるんだから、それでいいだろう。

ヘルタは頭の中で手早くそう考えをまとめると、音もなくすっと立ち上がった。

そのままばねが弾けるように、一足飛びにカガミの背中へ飛びかかる。

（もらった！ 死ねッ！）

気付いていないのか、カガミは振り返りもしなかった。

その肋骨の間から刃を滑り込ませ、瞬時に心臓を貫いてやろうと、ヘルタは必殺の気迫を込めて刃を突き出した。

「――がっ！？」

その途端に、バチンという音がして青白い閃光が弾け、彼女の全身に凄まじい衝撃が走った。

何が起きたのかもわからないうちに、意識が暗転した――。

「命乞いしといて、背後から不意打ち、かあ」

カガミは石畳に崩れ落ちてひくひくと痙攣しているヘルタを見下ろしながら、そう呟いて肩をすくめた。

彼女が本心から降参しているかどうかあやしいと思っていたので、背を向けた時にスーツの自動反撃機能をオンにしておいたのだ。

別にバリアのままでも問題はないわけだが、二度も仕掛けてくるのなら、多少は痛い目に合わせることも必要だろうし。

「あきらめない精神は結構だけど、ちょっと軽率過ぎないかな。君らの世界の魔道士とかにも、気付いていようといまいと、常にこういうバリア的な魔法で身を守ってるような腕利きはあるんじゃないの？」

まあ、見るからに無学そうな女だし、そんなことは知らなかったのかもしれないが。

返事はなく、体の痙攣が弱まってきたので、カガミはひょいと屈み込んで、彼女の様子を確認した。

「……あー。心臓が止まっちゃってるねえ？」

自動反撃型スタンガンの設定した出力は、彼女には少々強すぎたようだ。

物理的な衝撃ではなく生体電流への強力な介入によって、心臓の鼓動を含む身体機能を一時的、あるいは不可逆的に強制停止させたりする仕組みの装置だから、まあそういうこともあるだろう。

「原始的な刃物なんかで襲ってくるもんだから、ガジェットが爪を振りかざしたクマかなにかを相手にするくらいの想定で反撃しちゃったかな？ まあ、どうでもいいんだけど」

カガミはそう独り言ちながら、さて、こいつをどうしたものか、と考え始めた。

もう一度電気ショックで心臓を再動させてやってもいいが、全然何の危険もなかったとはいえこちらを殺そうとした相手にそこまでしてやる義理はあるまい。

別に何もせずにこのままここに放置して立ち去っても構やしないのだが、せっかく面白い経験をしたのに締めがそれではいささか味気ないし……。

「……あ、そうだ」

さっき、自分は魔道士だってことにしたんだった。

ならばこの死体を、それらしく使ってやることにしようじゃないか。

カガミはそう決めると、さっそく『簡易型人体改造機』を取り出して設定を始めた。

「たしか、死体を動かして不死者……アンデッドとかいうのにして使役する魔道士のことを、死霊術師、ネクロマンサーっていうんだっけね？」

今なら蘇生処置も間に合いそうだが、あえて死なせて一旦蛋白質の塊にし。

それを魔法ならぬ道具の力で、あらためて作り直す。

「僕が作るわけだから、君の残りの人生は僕のものってことで問題ないよね……ネクロマンサーってそういう感じでしょ、たぶん」

アンデッドとやらは確か、死体の肉を食ったり血を吸ったりするやつもいるが、基本的には何も食べないし、寝たりとかもしないものだったと思う。

エネルギー源は何なのかとか、それで活動の維持に支障はないのかとか気になることはあるが、とにかくそれに倣って、こいつも食べたり寝たりしなくていいようにしておこう。

「効率の悪い有機体の燃焼反応器官は飾りに残しといて、実際の活動エネルギー源は使い捨ての量子駆動式バッテリーで……」

使い捨てと言っても、人間の生命活動維持くらいなら数百年は問題ないはずだから、不死者らしくなるだろう。

「あとは、いかにも術者に絶対服従の傀儡っぽい感じになるように、反応とかを調整して、っと」

必要な設定を入れ終わると、改造機の電極をヘルタの額に押し当てて『書き換え』と『動力源変換・再活性化』の処置を開始した。

「———っ、ぎ……っ」

途端に、既に生命活動を終えたはずの体がびくんと跳ね、口から呻きのような声が漏れ始める。

体験版はここまでです。

死亡したヘルタに施された「アンデッド化」の全貌。
絶対服従の肉体に再起動された彼女は、カガミの最初の命令によって何をさせられるのか――。

続きは製品版

『異界滞在者カガミの改造記録：3 女盗賊・ヘルタは蘇生改造に
逆らえない』
でお楽しみください！